

第4分科会

「女性が提案するシニアの社会参加」

佐方 紀子

(高齢社会NGO連携協議会 理事、(社福)テレビ朝日福祉文化事業団 常務理事)

何かと話題になる中高年男性の地域デビュー、定年後に訪れた自由時間をどれだけの人が活用しているだろう。これまで培った経験や技術を何らかのかたちで社会に還元しているだろうか。地域社会にあっては、企業人の目線のままではなかなかうまくいきません。実際に、男性の力を必要とする現場は多くあるにもかかわらず、女性に比べてスムーズに社会参加ができていないのは何故か。

この分科会では、女性の側からのさまざまな提案をもとに「シニアの社会参加」について語り合いたいと思います。

〔趣旨〕

この分科会では、これまで仕事一筋で頑張ってきた方々がスムーズに地域社会に移行し、新たな社会参加、社会活動を始めていただけるよう、女性の側から提案を行っていきます。

出演者は全員女性で進めますが、これからの人生を実りあるものとし、充実した時間を共有したいという願う女性から、心優しい(！)エールを男性に送りたいと思います。

地域社会への男性の参加が簡単でない理由として、日本の社会というのは、欧米のような個人、「個」としての意識が確立されている社会とは違って企業への帰属意識も強く、仕事を止めてもなかなか「個」に戻りにくいということが背景としてあるのかも知れません。今日は、そのあたりのことを踏まえ、これまで多くの熟年世代、シニア世代を、それぞれの立場で目の当たりにしてこられたパネリストの方からお話を頂戴し、その後、会場の皆さまからのご意見を交え、ともに語り合う会にしたいと思っています。

司会進行は、テレビ朝日の下平さやかアナウンサーが担当します。

〔講演者〕

司 会 進：下平さやか テレビ朝日アナウンサー（やじうまプラス担当）

パネリスト：新谷 弘子 （社福）「パール」理事長

杉 啓以子 （社福）「江東園」事務局長、ケアセンター長

村田 幸子 前NHK解説委員

書 記：横山 理恵子 CMPジャパン(株)



第1部 パネリストからの提言

それでは、まず、渋谷区鉢山町にある総合福祉プラザ「パール」の理事長をされている新谷弘子さんにお話を伺いましょう。パールでは企業を定年退職された方々もスタッフとして働いていらっしゃるそうです。これまでのご経験、現場のご苦労などお聞かせ下さい。

= 新谷 弘子さん =

～いきいきと働くシニアは若い人のお手本～

パールは今年で創設10周年を迎えます。それより以前20数年にわたって、地域で高齢者のためのボランティア活動を続けていましたので、その繋がりが土台となり、渋谷の代官山に福祉施設を作りました。施設の運営には多くの人に関わっていただき、現在160名ほどの方に働いていただいています。人材育成という面でも、介護保険導入以前から看護大学と提携して独自のプログラムをつくり、ヘルパーの養成に当たってきましたが、2年程前からシニアの男性受講者が目立つようになりました。前職は、企業の管理職とか、自営業だとか、さまざまですが、大変福祉に興味をもたれていることが判りましたので、私どもの講習で高齢者福祉とはどういうものかということ話し、理解を得た上で、スタッフとして参加してもらいました。現在、約18名の方に、それぞれ過去の経験をいかせるポジションを担っていただいています。どの方も礼儀正しく、仕事に対する責任感と愛情があり、情熱をもって、いきいきと働く姿は、若い人たちのよいお手本となっています。

～企業と福祉の現場の温度差は、価値観の共有で解決できる～

少しとまどった経験もあります。以前、ある大手企業のOBグループがボランティアにられました。社会の最前線で働いていた企業戦士です。経験も知識も豊富で、さまざまなノウハウをお持ちで、情報処理にも明るく、てきぱきと元気よくやって下さっていました。ところが、そのうちに、施設内に不穏な空気が漂いはじめたのです。聞いてみると、受容れ側がタジタジとなってしまっている、要するに彼らのレベル、スピードに現場がついていけな

いのです。そこで、元企業戦士の方たちには、何が起きているか状況をよく説明し、ともに育っていくことの大切さ、「パール」というこの施設で働くための価値観について話し、少しずつ、時間をかけてやっていただくようにしました。価値観を共有することが解決の糸口になりました。自分の置かれた環境、目的を見ながら順応する、対応するという能力は、男女にかかわらず必要とされることだと思っています。

無理をせず自分のできる範囲で、デイサービスの送迎の手伝いや、過去の腕を活かして修繕作業を引き受けて下さる方などさまざまです。

～女性地域との橋渡し役を～

私的なことですが、パールの創設時に主人が大学を退職して、運営に参加してくれることになりました。医局で指導に当たっていたような基準を元に任務に就いたので、当初は企業戦士の方と同じような壁にぶつかりましたが、経験に学び、自分を見つめ直し、随分変わりました。今では、私生活の面でも食事の後の皿洗いなども手伝ってくれるようになりました。少々お皿が割れても怒りません(笑い)。子ども巣立ち、これからのラストステージを生きていくにはお互いの思いやりが必要です。地域の中でコミュニケーションをとることについては、女性の方が得意です。女性は、男性が地域に戻る際の橋渡し役をする、きっかけをつくってあげる、何かあれば誘ってあげるように心がけると男性も動きやすくなるのではと思います。

次は杉啓以子さんです。江東区春江にある社会福祉法人「江東園」の事務局長、ケアセンターつばきのセンター長をされています。「高齢者と子ども」の交流を通して様々な活動を実践されています。杉さんは、同世代の団塊世代の男性に一言おありになるとか。

=杉 啓以子さん=

～高齢者としてのステージは、学びなおしの場を与えられること～

江東園は0歳から100歳までの施設です。いわゆる養老院から出発したので、生活に困窮されている方、寝たきりや障害を持つ方、認知症の方もいらっしゃいます。デイサービスがあり、保育園があり、皆が右往左往しているようなところです。入居されている方は女性が多く、子供が近くにいれば、自然に子供と関わって世話をするようになる、そんな仕組みにしたのです。それでも、男性の場合はなかなか難しい面があったのですが、ひとつの事例があります。その男性は20年間位入居されたのですが、当初は寡黙で、一人黙々と書道をやっているような方でした。そこで、それを側で見ていたスタッフが、その腕を生かせる展示会を企画したところ、子どもたちから「すごいね」の声、そのうちに、男性は保育園に出入りするようになり、4月の馴らし保育のときなど、毎日来て、あやして遊んでくれるようになったのです。病気のときには子供たちがメッセージカードを届けたりして、自由に老人施設を来去するようになりました。ところが、しばらくして、男性が末期がんだとわかりました。身寄りがないという話だったのですが、音信不通の娘さんがいることがわかり相談員が

連絡をとったところ、最初は会いたくないとの冷たい返事だったそうです。けれども相談員の熱意も通じたのか、その後、娘さんは父親である男性に面会に来てくれたのです。それからしばらくして男性は亡くなりました。振り返って、何故、その男性が保育園の子供たちをかわいがったのかと思うとき、自分が放棄してしまった子育てをやりなおしたかったのではないか、忘れていた「自分」探し、「個人」としての自分を見つめ直したのではと思います。高齢になるということは、自分のやり残したこと、できなかったことをする場、学習の機会を与えられることではないでしょうか。どういうことかということ、企業の中で歯車の一部のように送っていた暮らしとは違う、自分の人生の場をもつということです。その男性のように、こつこつと続けていた書道が活かされる、ケアワーカーとか保育士が背中を押す、子供たちの前で存在価値を認められ、やる気が出てくる。子どもから尊敬の目を集め、愛される存在になっていく。

誰も、ほめられたい、愛されたいと思うのは人間らしい欲求なのです。まず行動してみる。周りにいる人が気づいて、ひとりでやっていることを一緒にやろうとしてくれる。それが新しい仲間の誕生となり、新しい企画も生まれる。地域の中での触れ合いができて、認め合う関係に発展していくのだと思います。

～地域の匂い、小さな景色の変化を五感で感じてみる～

地域の活動といえばまず町内会ですが、団塊世代についていえば、まだ町内会デビューはしたくない、属したくないという考えがあるようです。なぜなら、地域の長老の前では、男性の65歳あたりはまだまだ若造扱いをされてしまいます。そこで、まず底辺のこと、力仕事や、火の用心などからやらなければならない。言葉を変えれば、こきつかわれるのが嫌なのでしょう。それなら、新しい勢力となるような、NPOでも何でも立ち上げてみてはどうか。

まず地域を歩いてみる、自分が住んで暮らしている街の匂いを感じてみる。駅から自宅までの道に咲いている花、日によって違う土手の様子、川の匂いを意識する、自分の感性を取り戻すことから始めてみてはどうか。企業人から個人に戻り、ここで暮らしていくなら何が足りないか、そして何か出来ないかと考える。ひらいめいたら行動に移す。ゴミ拾いでも何でも。一日一善の精神をもつことは大事なことです。自分で暮らす地域で気付いたことはありますか。まずはそこから始まるのではと思います。

最後のパネリストは村田幸子さんです。村田さんは、女性アナウンサーの大先輩です。NHKの解説委員でもいらっしゃいました。福祉の現場にいらっしゃるお二人とは違った、ジャーナリストとしての視点から、シニアの社会参加について伺いたいと思います。

= 村田幸子さん =

～地域に参加できないのは男性ばかりではない～

20年来、現場を歩いてきた立場で、仕事で担ってきた取材を通して感じたことをお話し

ます。あちこち行くので比較できることが強みかなと思います。今日は男性をどう地域にソフトラディングさせるかというテーマですが、今や、決して男性だけの問題ではなく働き続けて定年を迎えた女性も同じです。地域との関わりが薄い、「おひとり様」が増えています。男性シングル、高齢シングルと様々ですが、先の講演であったように、「地縁、血縁をもたないまま、まさしく、それにかわる人間関係を構成できずに孤立していく」高齢者が確実に増えているのです。自分の例をとると、働き続けてきた女性が集まり、同じマンションに部屋を買い、近居するというカタチをとりました。これは友愛、友縁というひとつの人間関係の形成の仕方ですが、これからは様々な人間関係をつくりあげることが必要になってくると思います。これまで仕事一筋、仕事の場で自己実現をしてきて、定年後の事など考えるゆとりもなく、定年間近になって、はたと考える。これは男性、女性にかかわらず、働き続けてきた人が直面する課題です。定年間際になって、自分から仕事を引いたら何が残るのかはじめて実感するのです。

～ 現役時代は定時制の住民、定年後は全日制に～

現役時代というのは、地域にはめったに居ない。いわば定時制の住民です。それがリタイアすると全日制となる。どう変わればいいのかわからず、あがいているというのが現実です。これまで経験したことのない長寿時代の到来で、子育て期間より長い高齢期を手に入れ、どう暮らすのかのモデルをもたないまま、あがいているのが現状なのです。会社は縦社会、縦の関係でやってきた。ところが、個として暮らす地域は横の関係となる。なかなか自分の意識が変えられず、企業の論理を地域に持ち込んでしまう。男性も女性も模索しています。では、その背景にあるものは何かというと、あるようではなかった精神的自立なのだと思います。職場と家族に依存し、働き続けてきたので、生活的自立もできていない。身の回りのことが自分で十分にできないまま、地域に放り出される。社会情勢の話はできても、近所づきあいに必要な日常的な会話にはついていけない。そこで夫が定年になると妻のボランティア定年という嘆きにつながるようになります。

～ これまでの枠組みではおさまらない「人生90年の到来」

人生90年の到来は、これまでの60年の枠組みの中ではおさまらず、根底からものさしを変える必要があります。高齢者は弱者というイメージを自ら捨て、やってもらうという考えから、まだまだ現役として社会にかかわり、自ら社会を変えていくという意気込みが大事となります。しかしまだそこまでの実感が伴わない。自分で人生を設計し、主体性をもって社会参画したいけれど、個として生きる訓練はされておらず、これまで、家庭人、企業人として暮らしてきたので肩書きが取れると、こころもとない・・・。

けれども、男、女の別なく社会人として考えれば、地域住民としての役割を担うのは当たり前のこと。企業の一員であると同時に、住んでいる地域の一員としての意識を常に持つ、どこに勤めていようが、地域住民であるという、二束のわらじを手の内に入れて生きるような生き方をしなければと思います。それから社会も、従来のように夫婦二人、子ども二人で

標準というようなとらえ方をするのではなく、統計的にも1人暮らしが増えているのですから、個人としてとらえることが、ますます大切になってきています。

また、その個人と地域をつなぐ地域社会の仲人的役割を、社会参加の処方箋としての役割を行政が担ってほしい。私は5年前にできた「地域で活動できる人材を育てる」江戸川総合人生大学で介護福祉学科を担当していますが、生徒たちは、学ぶことで自信をもち、自分のよって立つ基盤ができることで、地域に出たあとの活動が骨太になります。プロの住民へと変わり、どう行動するかを考えるようになるのです。迷っている人たちにこういう学びの機会を行政が提供し、準備する、そして心のチャンネルを切り替えることができるような後押し仕組みが、社会にできればと思います。

第2部 質疑応答 参加された方々からの質問を受けてー

パネリストの方々から貴重な意見を頂戴しましたが、ご参加の男性、女性の皆様からご意見、ご質問を頂戴したいと思います。皆様の中には実際にさまざまな活動をされている方もいらっしゃるようですね。

（会場 男性）

10年ほど前、高齢者問題の国際プロジェクトに参加していたのですが、北欧からの関係者を金沢の施設に案内した際、幼児を抱いた高齢の方々から歓迎を受けました。北欧では見られない、高齢者と子供が共存する施設があることに驚かれた経緯があります。杉さんは、高齢者と保育園児との垣根のない交流を早くから推進されていたのですか。はじめからこの方式だったのですか。そのきっかけを教えてください。

= 杉さん =

もともとご老人を収容するための小さな施設を建てたことに始まり、昭和37年に養護老人ホームの認可を受け、51年に保育園を作りました。社会での特養のニーズが高まるにつれ、郊外に多く建てられるようになりましたが、それなら、ここで一緒に、ひとつ屋根の下に、住める場を作ろうと昭和62年にこの方式にしました。1階に共有の場とリハビリの間を、子どもたちはリハビリ室にも出入りします。2階、3階を居室にしました。そのころから保育園に子供を預けて、外に出て働く女性も増え、ホームにひっそりと入居されている高齢の方々の老人力を生かせる方法はないだろうか、様々なプログラムを考えました。祖父母と同居していた昔の日本人の原風景を取り戻そうというのがコンセプトでした。もう一つは、ノーマライゼーションの実践です。たまたま子供を連れて出かけたハワイでは、浜辺でサリドマイドの女性がピキニを着てごく自然に座っているのに、日本に帰ったら車椅子の人を指差すような差別がまだ残っていました。子供も高齢者も障害者も安心して楽しく暮らせる世界を、この江東園で実現したいという思いがありました。

（会場 男性）

男性の地域参加というテーマについて言うと、家内と違って夫である自分は、住んでいるマンションの同じ階の住民の顔もおぼつかない。どうすれば女性と同じような感性がもてるかなと。

= 杉さん =

女性には二本の手があります。仕事を持ちながら出産、子育て、地域の諸課題に直面する、不登校や家庭内暴力の問題、地域のボランティアやサークルに参加する中で、ともに悩み学ぶ仲間に出会います。男性は残念ながら一本の手、仕事で手一杯で地域とかかわりが持ちにくい。これからは女性のように二本の手をもって、地域をよく見ることです。図書館がない、ゴミ置き場がない等々見えてくるはず。企業の中で培った問題を見つける能力や、営業力、組織力、ネットワーク力を身近なことに生かして声を上げてみてください。そこでコミュニケーションができます。問題を共有するというところに意義があるのです。

= 村田さん =

男の方は概して家の中であまり会話をしません。家庭でできないことを、いきなり地域でやれと言われても難しいと思います。仕事の話はできても近所の話題はできない。地域は暮らしの場ですから、暮らしができていないと生活人としての実感もない。女性のようにあたりまえにやってきていないから、当然なのですが、これからは、いままで会社人間では味わえなかった楽しみを知るといった気持ちに切り替えるといいですね。

（会場 男性）

犬の散歩を毎日やっていると、近所の女性達と会話が弾んで井戸端会議に発展したりします。ところが男同士の場合は挨拶だけで、なかなか親しくなれない。女性は素晴らしいと感心していたのですが、あるとき、活動的だった奥さんが出てこなくなり、ついには活動をやめてしまった。おかしいなと思っていると、ご主人が定年を迎えて外に出られなくなったのだとわかりました。男性が女性の足をひっぱってしまったということですが、こうなってくると、地域デビュー以前の問題だと考えさせられました。結局男性は家庭内でどれだけ家族の活動に参加してきたか。家庭の文化を大事にすれば、自ずと地域にも飛びこめるのではと思いました。

= 新谷さん =

今、個人と地域とのつながりが大きな話題になっていますね。家庭環境や、地域と密着する習慣が日本に定着していないということもありますが、背景には、もう少し大きな、社会と教育の問題があるのではないかと推察します。ボランティア活動ということに関してですが、37年程前、主人の仕事の関係で、アメリカで2年ほど家族で生活をしました。その際、私たちの到着の出迎えに始まり、家探しから子供たちの面倒まで、地域のボランティアの方たちが手助けをしてくださり、私たちが慣れるまでさまざまなサポートをしてくれました。その後も交流を通して、アメリカの社会に根付いている地域貢献の習慣を身を持って体験し、その根底にあるのは家庭内での小さな頃からの躾、自分の行動に責任を持たせる、社会との

関係や、報酬を得る厳しさを教え込むという、幼児期からの教育の積み重ねなのだわかりました。家庭教育と地域教育が合体となっていることを知り非常に新鮮な驚きを覚えました。ボランティア活動は、個人の意思や努力のみではなく、支える教育や社会がその背景にあるのだと思いました。最近になって日本でもやっとその点が理解されるようになり、私の施設にも、教員や国家公務員の方が実習に来られるようになり世の中が変わってきたと感じています。それから、報酬という点で感じるのは、ボランティアで働く場合、「年金プラスアルファで」の意識の方が多く、受給額との兼ね合いで働く時間を自ら制限されたりします。年代によって少し差があるようですが、その点が解決され、整理されると、しっかり働く高齢者の方がもっと増え活性化すると思います。

（会場 男性）

私は62歳ですが、年金をもらっています。65からは基礎年金が満額支給されるのですが、報酬比例で収入に応じて減らされることを思うと、働かなくても収入は変わりません。報酬の仕組みを考えるとどうしようかと思いますが、働く方が気力も出て楽しいと感じます。

（会場 女性）

介護福祉士を養成している大学の教員をしています。シニアライフアドバイザーとして中高年の相談にもあたっています。中高年男性の関心は、5Kといわれる経済、健康、家族、介護、孤独です。いろいろな事例に遭遇しましたが、やはり社会参加のまえに家庭内参加して、病気や災害の時はどうするかなど、身近なことを協議しておくべきでは。その次に社会参加ではないかと思います。日本は古来より老人を敬う国です。ホームヘルパーに1級から3級とレベル分けをせず、高齢者のお世話をする仕事は皆同じ資格にして、力を貸しあい、高齢者に手を差し伸べる世の中になればと思います。施設の側から見てどういうボランティアが望まれるのか教えて下さい。

= 新谷さん =

介護福祉士の資格を取得していても、現場では再教育をしなければならないようなことも多々ありましたが、去年あたりから介護に関心を持つ人の流れが変わり状況がよくなってきていると感じています。学校側の熱意も感じられますし、教育の場では、即戦力になる技術だけではなく、介護のこころ、基本の理念を教えたいですね。

（会場 男性）

定年退職したからといって、すぐに社会参加をするのはやはり無理があります。不況で大変な時代ですし、会社では効率化、生産性を上げると余裕がない。社会参加するには現役の時代からこころの準備をしなくてはということですね。

= 杉さん =

現役時代から培っていかなくてはならないのですが、現実的には忙しすぎる。時代は変わっていますから、次の世代は、余力をもって社会に参加できるようなワークライフバラ

ンスを考えるべき時だと思います。早く家に帰す日を決めるとか、家庭を振り返る必要性について企業がきちんと時間を設け再教育する、その種の講演会に出席させるなど、学習の機会を与えるというようなことが求められると思います。リタイアしてからではなく現役のときに、社会参加のための心構えなど、NPOや、ふさわしい講師がいる団体や組織を活用してほしい。

（会場 女性）

やはり、一番先に来るのは家庭です。奥さんと話合っしてほしい。テレ朝の「人生の楽園」を見てほしい（笑）。どこで、誰と、どんな人生を送りたいのか、リタイアする前から夫婦でよく話し合うこと。これが一番の早道ではないか。社会の変革を待たずともできることだと思っています。

= 新谷さん =

欠点をあげるより、ほめあうことが何より。お互いが補いあい助けあうという心が大事ですね。

地域の中でも同じです。お互いに助けあい、感謝することで理解しあう土壌を築き、一緒に生きていきたいと思いますね。

（会場 女性）

これまで地域のことは何もせず両親に任せていましたが、始めて自分で自治会の班長を半年間やってみて、仕事の多さに驚くと同時に、その内容がとても勉強になりました。あらゆることをやり、多くの住民の方と話し、自分が会社で培った価値観とは違う価値観に触れることができました。これこそ男性にも勉強して欲しいと思いました。家族を亡くされた方から思わぬ感謝のことはをいただき自分でも感激したことがあります。地域に参加することの素晴らしさを実感しています。

= 村田さん =

男の人はなかなか地域に乗り出さないというけれど、私はそう捨てたものでもないと思っています。なぜかという、この数年の動きを見ていると、このような会への男性の参加者が確実に増えているからです。男性が我が事として高齢期を考えるようになってきているのです。今、変革の段階でまだものさしを変えきっていない。その迷いが社会全体にあります。でも、いいお手本があっちこっちに出てきているのも事実で、これからもっと、どうすればいいかが見えてくると思います。いくつかの例をあげると、群馬県の太田高校の卒業生が集まって、ノミュニケーションのままではいけないと、そこからの目の付けどころが男性のいいところだと思いますが、市民活動の募集に応じて600万の予算を獲得し、活動の拠点を実際につくりました。前職がさまざま、ですから、一級建築士だった人が廃業した仏壇屋さんを改造し、銀行マンや行政書士だった人を活用して、そこで相談事業を行っています。そのうち奥さん方を巻き込んで、喫茶店や食堂へと広げていった。また、神戸で社長をされていた方ですが、兵庫県が創設した仕事創造塾を見に行っただけをきっかけに、仲間FM放送

局をやり始めた。15分の枠を買い、自分たちで取材し「元気神戸」という番組を作っている。感想を聞いてみると、「定年後にこんな素晴らしい生活が待っているとは夢にも思わなかった」と、口をそろえて言っている。これまでの仕事の延長線上の人もいれば全く違うことを始める人もいる。延長戦上で頑張っているのは、東尋坊の自殺防止活動を続けている警察OBの方です。現役時代、十分にできなかったことを悔やむお気持ちがそうさせているという例です。このように素晴らしいモデルが、あちらこちらに沢山出てきているのです。今は過渡期にありますし、模索しながら、少し肩の力を抜いて一緒に作り上げていけばいいのではないかと考えています。

〔まとめに〕 佐方紀子

パネリストの方、会場の男性、女性の方から、多くのご意見やご提案をいただきました。まとめてみると、

社会参加のまえにまず家庭内参加を

企業にあっても地域の住民、一個人であることを忘れずに

これからの人生は自分で設計する

お互いに助けあい、理解しあって、この長寿の時代を元気で生きていきたいという結論が出たように思います。

閑古鳥が鳴く分科会になるのではと心配しましたが、このように多くの方にご参加いただき、活発なご意見をいただきました。7月末で退職し来年65歳となる自身も次の人生どうしたらいいものか、まだ見つかっていないのが現状で、本日の会議は大変参考になった次第です。

皆さまも、何か持ち帰って頂けたらと願っています。

パネリストの方々、ご参加くださった皆さまのご協力に感謝し終了といたします。

